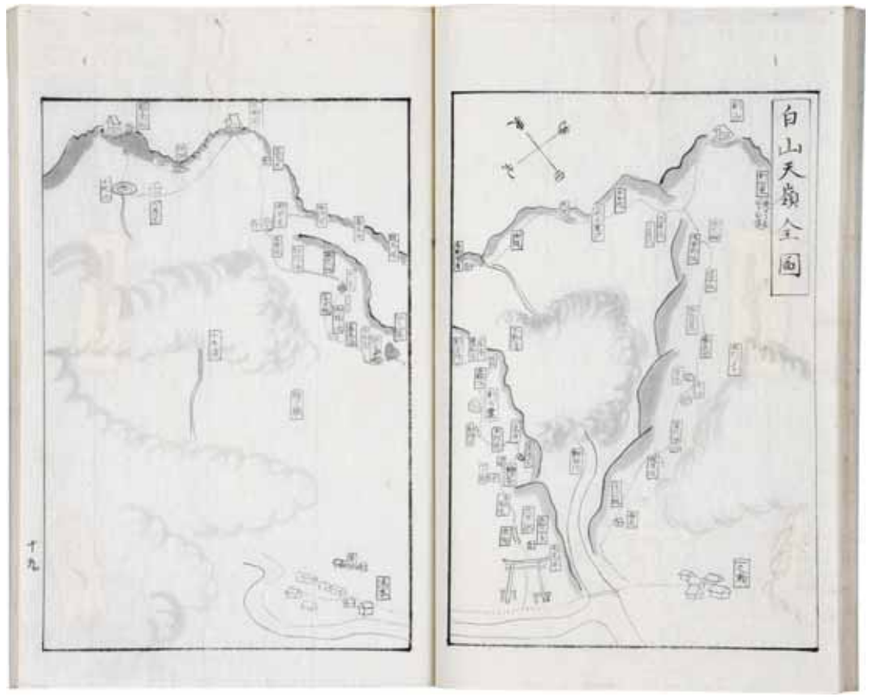
「白山全上記」の反響

「白山全上記」（西尾市岩瀬文庫所蔵）は、福井藩士の加賀成教（?-1846）が1830年（文政13）に友人とともに白山に登った記録です。携行すべき防寒具や雨具、食料、登山に適した時期（6月土用中から中元まで）の記述にはじまり、出発の7月12日から24日まで、日ごとにポイントとなる分岐点の道標や塚、史跡や名所・難所が簡略に紹介され、各ポイント間のおよその里程、宿料や導者の雇賃などについてもていねいに書留められています。

全体としては、加賀自身が「附言」で述べているとおり、後年の登山者に役立つような実用的な内容となっています。そのなかで、途中立ち寄った勝山の知人宅で市ノ瀬出身者が留意事項を書いてくれたこと、谷村では浪人・無頼の者と怪しまれ、「老翁ノ室ナリトテ怪キ小屋」に泊められたこと、市ノ瀬での盂蘭盆の古雅な「カンコ踊リ」のようす、湯元の茶屋の妻が土産にくれた「竹米ノ団子」が小麦に似た味であったことなど、旅先での人間的なふれあいが感じられる記述も少なくありません。また加賀は絵心もあったようで、大杉峠（谷峠）からの眺望略図や難所であった風嵐大橋、白山麓湯元の図など、軽妙な挿絵が書き加えられています。

「白山全上ハ士タル者一タビ行ベキ処ナリ」とするこの記録は、同僚の藩士たちを大いに触発したようで、これにならって白玉呉竹斎光美（武沢光美）「白山道の栞」（1831年）、高田保浄「続白山紀行」（1833年）があいついで執筆されています。

なお、ここで紹介した「白山全上記」には朱筆等で書込みが随所にみられます。これと「続白山紀行」が引用している内容を比較すると、これらが加賀自身による増補であることがわかります。

■ 加賀成教「白山全上記」1830年（文政13）　西尾市岩瀬文庫所蔵